**中学生の部：最優秀　国務大臣・国家公安委員長賞**

じることはなかったと思う。

　そんな私が命を意識するようになったのは学校で行われた、「命の大切さを

学ぶ授業」を受講したことがきっかけである。教室では交通事故で娘さんを亡

くされた女性が当時の事を話してくれた。私たちと同じ中学生だったその少女

**「今を生きる」とは**

石川町立石川中学校２年　　 田子 礼良

　命。私たちはその身近にありながら、命の大切を本当に分かっているだろうか。私は正直、命について考えることはあったとしても、命の危険をそばに感じることはなかったと思う。

　そんな私が命を意識するようになったのは学校で行われた、「命の大切さを学ぶ」を受講したことがきっかけである。教室では交通事故で娘さんを亡くされた女性が当時の事を話してくれた。私たちと同じ中学生だったその少女は朝まで、妹と笑顔で会話し、母親にいってきますと言っていつものように家をあとにした。その日の夕方、彼女は命を落とした。私は思い浮かべた。今朝のことを。朝練がある私は母と少し話をしてすぐに家を出た。そんな私の後姿に命の危険など母が感じるわけがない。きっと亡くなった少女のお母さんも当時、そんなふうには感じなかったはずだ。そうなのだ。いつもここにある普通の毎日を支えているのが私の命なのだ。そして私はこの命があるから父や母、妹と話すことができる。日々がその証である。そう思うことができた。でも私が生きる時間が誰かの生きたかった未来なのかもしれないのだと、女性の話を聞いて感じた。それと同時に、私にもいつも命の危険がそう遠くないところにあるということを実感した。なぜなら、話してくれた女性が私たちにつらいはずの過去を最後まで伝えてくれたからだ。目に涙を浮かばせて、私たちに「命の大切さ」を教えてくれたのだ。何気ない毎日を守るためにこの命を大切にしていきたい。そして私は命についてもっと家族と話したくなった。私は教室のあと、母と命について話すことにした。母は私に知り合いの救命救急士さんの話をしてくれた。いつも生死と間近で向き合っている仕事だ。ある日、子供を連れて車に乗っていたお母さんが、子供にシートベルトを着用させなかったために、事故でお子さんを亡くされてしまった。一生懸命助けようとしたけれど、息が戻ってくることはなく、とてもショックを受けた、と母に話していたという。母はそれ以来必ずシートベルトを確認して車を走らせるそうだ。私は母がそんなふうに気をつけてくれていたことを知って、嬉しくなった。母と命の話をして良かったと思った。母は私や妹の命をとても大切にしてくれているのだと、安心した。私は色んな人に、この命を守ってもらって、今を生きている。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　「命の大切さを学ぶ教室」。この教室を受講して、家族と命について話して深く考えることができた。前よりずっと自分の命を大切にするようになった。今､生きていることで私は笑うことができる。泣くことができる。その命が自分だけのものではないということを忘れず、これからもたくさんのことを感じ、たくさんのことを学んで、毎日を生きていきたい。